

中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化

——写真にみる景観の変遷をととして——

藤 永 豪

FUJINAGA Go

(COE 研究員・PD)

はじめに

環境と景観に関する図像資料をどのように整理し、活用していくのか。これは本 COE プログラムにおける重要な課題の 1 つである。ここでいう図像資料とは、主として「澁澤写真」⁽¹⁾を含めた写真資料を指す。写真にはその解釈を巡る様々な問題が付随し、ときには資料として扱う際の判断に逡巡する場合もある⁽²⁾。しかしながら、一方で、その研究者自身が撮影し、明確な目的のもとに使用する場合には、写真は地域や民俗を語り、他者に理解させる上で、大きな役割を果たす⁽³⁾。筆者はこれまで、農山村を対象に、そこに居住する人々の生活空間とその認識について調査・研究を行ってきた⁽⁴⁾。そこで、本報告では中山間地域の集落を対象に、住民の環境利用とその変化について、筆者自身が撮影した景観資料を用いながら、分析・考察をおこなう。このことは、写真を用いた地域や民俗を記録・保存することの意義、ひいては、本 COE プログラムにおける「澁澤写真」をもとにした環境と景観の変化に関する研究の可能性を探ることにもつながると考える。

I 「環境」と「景観」

考察を進めるにあたって、まず「環境」と「景観」という 2 つの言葉と両者の関係について、簡単だが考えてみたい。

近年、温暖化や酸性雨などの、地球規模でのいわゆる環境問題がクローズアップされ、人々の関心を集めている。その一方で、里地・里山といったような言葉で表現される身近な環境と人間との関係も注目されている。実際、わが国では市民団体を中心とする NPO 法人が幾つも設立され、田植えや稲刈りなどの農作業

の体験、水田や雑木林に生きる動植物の観察といった活動が盛んにおこなわれている。またこのような活動は、小中学校における環境教育あるいは総合学習の中でも積極的に活用されている。では、この場合の「環境」とは何なのか。そして、本 COE プログラムの中で扱われる「環境」とは何なのか。

鳥越（1994）はいう。「環境」Environment とは、一般に主体を取り巻く諸条件と理解されている。つまりある「主体」（自分という人間であってもよいし、ある組織体であってもよい）の外部に存在し、その主体に影響を与える要素群を環境とよんでいるのである。」この鳥越が述べる「環境」とは、大きく捉えれば、先ほど述べた全人類を包み込むような「環境」問題と一国あるいはその中の特定地域の様相を指す「環境」との 2 つを含むことになる。ただし、本 COE プログラムが掲げる「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というテーマを踏まえるならば、「環境」とは地道に市井に生きてきた人々が相手としてきた「対象」であり、自らを取り巻く自然を活用してきた歴史ともいえる。もちろん、温暖化や酸性雨、外来種による生態系の攪乱といった世界的な「環境」問題もローカルな場における生活の変化に影響を及ぼしている。しかしながら、少なくとも、本 COE プログラムで取り上げる「環境」の端緒とはあくまでミクロなスケールにおける生活世界の中のものである。民族や部族あるいはムラなどの社会集団が、彼らの意識のおよぶ空間的範囲内で実際に活動し、体験してきた「対象」である。

一方、「景観」はどのように捉えればよいのか。筆者の専攻する地理学では、「景観」とはもともとドイツ語のランドシャフト Landschaft の訳語であった。ランドシャフトに対する景観という訳は、用語法上の

混乱や矛盾から、不適切な部分もあるとされ、景域、風景、相観、地域、風土、時には環境とも訳され、その後、活発な議論がなされた（小野寺 1995）。途中の細かな論争は省くが、現在では「人間活動はもちろんのこと、動植物の営みや地球そのものの営力によって地表に現れた人的・生物的・無機的諸要素が結びついた総体」、として理解されているようである。とはいえ、短い文章の中にこのような言葉を並べてもなかなか理解しづらい。そこで、前述した里地・里山をもう一度、思い浮かべていただきたい。周知のよう、里地・里山には宅地を中心に耕作地（水田や畑地）、雑木林等が配置され、物理的な景観として存在する。これは福田（1980）が述べるムラ・ノラ・ヤマ（ハラ）の村落構成と対応する。宅地は人々の定住する場として重要な空間であり、寺社等の人々の精神的なよりどころとなる場所も存在する。耕作地は食料生産の場であり、雑木林では薪炭材が採集される。また、木の実や山菜、山草の採集やイノシシや野ウサギなどの狩猟も行われる。これは住民による枝打ちや下草刈りといった資源としての雑木林の管理の上に成り立つ（広井 2001；犬井 1992）。加えて、落ち葉は秋に集められ、藁や自宅で飼育されている牛馬の糞と混ぜられ、発酵させ、翌春には耕作地に鋤き込まれる。地域によっては用水路の底に溜まった植物等の残渣も水中の微生物が分解し、肥料として水田に揚げられる。しかも水田や用水路、溜め池にはメダカやドジョウ、ナマズなどの魚類やタガメやミズカマキリ、ゲンゴロウなどの水生昆虫、カエルやイモリなどの両生類が棲み、食物連鎖の中で先ほどのイノシシや野ウサギの生息を支えている（守山 1988；1997）。さらには人間が意図しないところでも、ミズニラやデンジソウ、オニバスといった現在では絶滅が危惧される植物の生育の場となり、生物の多様性を生み出している。

このような形で、ムラとノラとヤマ（ハラ）の間において、人間や生物、そのほかの有機物・無機物が互いに結びつきあい、循環し、里地・里山の景観を形作っている（武内他編 2001；日本林業技術協会編 2000；山本 2000；2003）。

ここまで考えてくると、「環境」と「景観」はある意味、表裏一体の関係にあることが分かる。確かに、

各学問分野が取り組んでいる「環境」と「景観」という対象やその厳密な定義には、微妙な差異が存在し、意見の相違もある。しかし、「環境」を対象とすることは「景観」を扱うことになり、また、「景観」を対象とすることは、結局は「環境」を扱うことになる。人間の営為が環境に働きかけた結果として景観を捉えるならば、環境から景観を、景観から環境を考察していくことはごく自然なことであろう。⁽⁵⁾

以上のことを踏まえ、本報告では、「環境利用」を「人々が生きてきた歴史の中で、彼らが自らを取り巻く環境に働きかけ、生活空間を展開してきた過程と現状」、その結果、「地表に現れたあらゆる地物の総体」を「景観」として捉えたい。

具体的には、中山間地域の一集落を対象とし、住民たちの環境利用と景観の変化について、写真を主な資料として考察する。ただし、この場合の「環境」とは、本報告が村落を対象としていることから、「自然環境」と同義のものとし、住民の「環境」に対する「働きかけ」を、主として、農業や林業などを中心とした生業活動としたい。ただし、「景観」を形成するものは、生業活動のみでなく、背後にはムラ人の関係やムラ社会そのもの、その中で形作られた慣習や決まりごと、信仰、畏怖といった観念や価値観、果てはムラ人各個人が抱く感情やイメージも隠されている。もちろん、政策や経済状況などの農山村を取り巻く社会経済的環境の変化も影響している。本報告ではこれらの点についても言及していきたい。

II 研究対象地域の概要

研究対象地域として、佐賀県東松浦郡厳木町に立地する鳥越地区を選定した（図 1）。厳木町は佐賀県の中央部に位置し、筑紫山地の山懷に抱かれた町である。2000 年の国勢調査によれば、厳木町の人口は 5,815、世帯数は 1,823 となっている。鳥越地区は厳木町の中央よりやや北部に位置し、集落は標高およそ 400～450 m に立地する（写真 1）。2004 年 9 月現在、人口 39、世帯数 11 である。全住民中 23 人が 50 歳以上であり、高齢化が進んでいる。

厳木町は、大正期から第二次世界大戦後の 1950 年代半ばまで、近隣の唐津市や多久市とともに石炭採掘



図1 研究対象地域

(国土地理院発行2万5千分の1地形図「相知」昭和44年測量・昭和60年修正測量・平成11年部分修正測量の一部を引用・加筆)

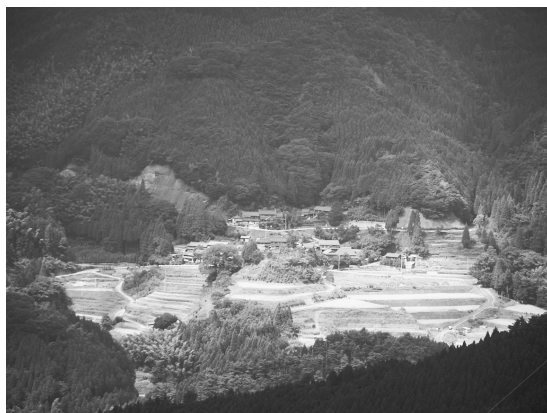


写真1 鳥越集落遠景(2004年9月筆者撮影)
佐賀県最高峰天山(標高1046.2m)の中腹より望む。集落の背後には山があり、前面には水田が広がる。

で栄えたが、鳥越地区の住民の主要な生業は農林業にあった。江戸中期から明治期にかけての主要な農産物は米・麦・粟・稗・蕎麦の穀物のほか、桑や楮、茶、麻、大豆、煙草・綿花・樺等が栽培されていた(厳木

町教育委員会1971:338-347)。しかしながら、1883(明治16)年に編纂された『東松浦郡村誌』には、

五ヶ山(鳥越、天川、星領、広川、平之、鳥巢)ハ山中ノ位置ヲメ最高ノ所ニシテ、熟地ハ泥濘深ク山野ハ秃兀其質礫、郡内最下等トス(中略)秋季早冷ノ年ハ稲梁全ク登ラス(略)

とあり、鳥越を含めた山あいの集落における農業は湿田と寒冷な気候のためにきわめて脆弱であったことが理解される。鳥越地区では米麦のほかには楮や葛葉が栽培され、周辺の集落や県内外に販売されていた(厳木町教育委員会1971:347-352)。明治30年代にはミカン栽培が厳木町にも導入されるが、標高の高い鳥越地区では寒冷な気候のために普及することはなかった。代わりに、1960年代まで主な現金収入となっ

たのは木炭であった。しかし高度経済成長期以降は、木炭の需要も落ち込み、出稼ぎや日雇いで収入を得る世帯が増加するとともに、過疎化も進行した。また、一時期、林業も活況を呈し、国策の後押しもあり、植林が進んだが、安価な輸入木材と住民の高齢化による維持・管理の困難さのために、衰退を余儀なくされた。現在では、恒常的な農外就業が浸透し、ほぼ全戸が兼業農家となった。

本報告は、以上のような鳥越地区の歴史的な流れの中で、住民たちがどのように彼らを取り巻く環境を利用し、生活空間を成り立たせ、景観を形作ってきたのか、について、写真をもちいながら考察していく。なお、現地調査は2004年8月20日から9月13日にかけて実施した。

III 鳥越地区における環境利用と景観の変化

1 鳥越地区における伝統的な環境利用と生活空間

ここでは、住民への聞き取り調査の結果と国土地理院発行の空中写真をもちいながら、鳥越地区におけるかつての環境利用とそこからみえてくる住民の生活空間を概観する。聞き取り調査では、70歳代の男性3人、50歳代の男性1人、70歳代の女性1人、50歳代の女性1人の計6人の住民にご協力いただいた。そして、可能な限り、集落の中を案内していただき、どこでどのような活動を行っていたのかを聞き取った。

写真2は、1946年米軍撮影の空中写真に、聞き取った住民の環境利用に関する場所とおおよその空間的範囲を示したものである。また、参考として、明治33年測量、昭和26年応急修正の縮尺5万分の1地形図を図2に示した。

生業に関する場所として挙げたもののうち、a.のイワセトノタニからl.のウヲヅルまでは、水田または畑地として利用されてきた。各地名で示された範囲内の耕作地はいくつかに細分化され、認識されていた。たとえば、d.ウソには、オミヤンマエ、オミヤンシタ、クロ（ノ）モト、ツジ、ドウ（ン）マエ、ナガイ、ハルといった耕作地が存在し、l.ウヲヅルはk.ウツボダニに近い耕作地をチカウヲヅルと呼び、区別していた。写真2には多数の小さな水田とそれらを区切る畦畔の筋がみてとれる。この写真2と図2を重ね合わ

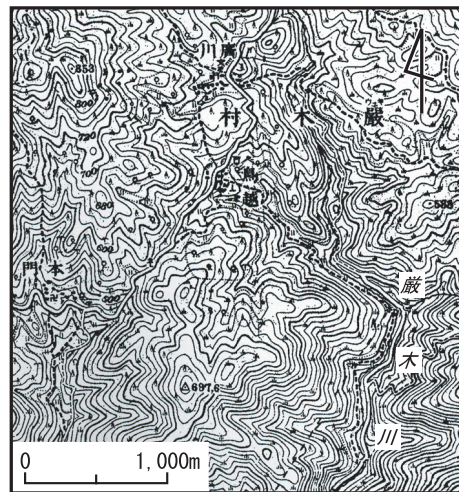
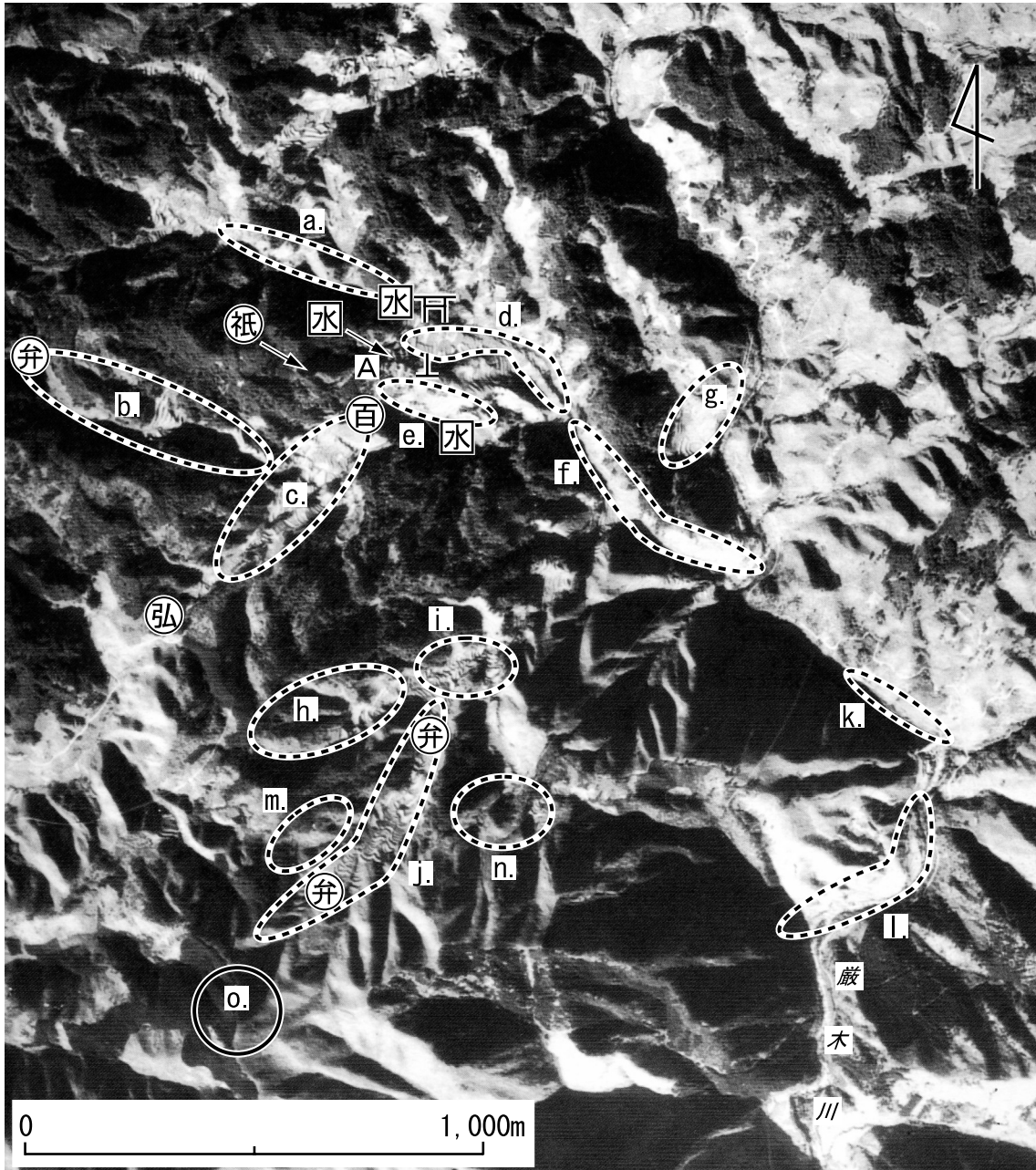


図2 1951年発行の地形図にみる鳥越地区
(国土地理院発行5万分の1地形図「濱崎」明治33年
測量・昭和26年応急修正の一部を引用・加筆)

せてみると、これらの耕作地は鳥越集落周辺の比較的平坦な箇所と西部および南部の谷、そして、巖木川の河岸に散在していることが分かる。耕作地の分布は、集落から直線距離にして、半径約2km以内に収まるが、曲がりくねった農道や高低差を考えると、住民たちはその数倍の距離を日常的に歩いていたことになる。さらに山や谷などの地形上の障壁を考えると、その労力は計り知れない。事実、b.カキバヤシノタニやj.ウグエノタニの最奥部の耕作地は、標高が最も高く、600mを超えるのに対して、k.ウツボダニとl.ウヲヅルは標高およそ250~300mと最も低く、その垂直差は300m以上ある。鳥越地区の人々の生活は、日々、この高低差を移動することでもあった。

ただし、写真2に示したa.イワセトノタニからl.ウヲヅルまでの空間のすべてが耕作地としてのみ利用されていたわけではない。いくつかの地名にタニやヤマという語彙が含まれていることから分かるように、住民の認識する各空間は、地形に基づいて大まかに分類され、その中に耕作地が含まれている。したがって、これらの空間では、農耕以外にも、山菜や山草、木の実、キノコ類などの採集も行われていた。春にはゼンマイ、ワラビ、シカ（ウド）、ダラ（タラ）の実、ツクシ、ツワ、フキが、秋にはクリやネズミダケ（ホウキタケ）、シシタケ（コウタケ）、マツタケが採れた。これらの山菜・山草・キノコ類の採集には規制はなく、他世帯の住民が所有・管理する山林でも、鳥越の住民であれば、自由に採集することができた。このほか、



A 鳥越集落

生業に関する場所

a. イワセトノタニ b. カキバヤシノタニ c. アマミズ d. ウソ e. ミナミ f. ヤマナカ
g. マン(ノ)タニ h. ケタヤマ i. ホカウラ(クタンダニ) j. ウーグエノタニ k. ウツボダニ
l. ウヲヅル m. ダノクサ刈り場 n. カヤ刈り場 o. タカミネ

信仰に関する場所

𠂔 稻荷神社 𠂔 祇園様 𠂔 弁天様 𠂔 百万様 (大日様) 𠂔 弘法大師様

その他

水 水車小屋 ⊥ 経塚（墓地）

写真2 鳥越地区における伝統的な環境利用に関する場所とその空間（1946年）

(聞き取り調査をもとに国土地理院発行米空中写真「M 665」(米軍 1946 年撮影)の一部を引用・加筆)

各場所の位置および範囲は聞取りにもとづくおおよその範囲であり、必ずしもすべてが正確というわけではない。

沢ではカニや小魚を捕り、食料としていた。

また、m. のダノクサ刈り場は採草地であり、刈った草は水田に鋤き込まれたり、家畜の飼料となった。当時の鳥越では、どの家も必ず1〜2頭の牛を飼育していた。ダノクサ刈り場からの草の運搬は、子どもたちの大切な手伝いの1つであり、牛を引き、自宅とダノクサ刈り場を何度も往復していた。このダノクサ刈り場は入会地であり、鳥越の誰もが利用可能であった。一方、n. のカヤ刈り場は、文字どおり、カヤが生い茂る草原であった。カヤは屋根の葺き替え専用であり、他の目的に使用されることは一切なかった。もちろん、カヤ刈り場は鳥越の共有地であったが、利用できる家が年まわりで決められ、個人で勝手にカヤを刈ることはきつく戒められていた。資源としてのカヤを持続的に利用するために、定められた年に、定められた家のために、定められた面積分だけ刈り取られたのである。

o. のタカミネは狩猟の場となった。住民はイノシシや野ウサギ、キジを撃ち、食用とするともに食肉商と取引していた。もちろん、タカミネ以外の山林でも狩猟が行われていた。⁽⁶⁾ 時には鳥越地区や厳木町の外にまで獲物を求めたという。

続いて、木炭生産についてみていく。炭焼きに使われたカマ場は集落近辺から、遠く離れた山中まで広い範囲に作られた。炭焼きは住民各個人で行われ、彼らが所有する山林から、用木を調達した。1つのカマ場を長期間に渡って使用し続けることはなく、必要に応じて、あらゆる箇所に数多くのカマ場が作られた。そのため、具体的なカマ場の位置とその分布範囲を示すことはできないが、写真2には炭焼きに用いられたカシ、クヌギ、シイ、マテ（マテバシイ）などの雑木が広い範囲にみられることから、むしろ、鳥越地区の山林全体が木炭生産の場であったといえる。また、用木は根から掘り返すのではなく、根元から一定の高さの箇所まで切り倒し、株を残すようにした。翌春には株から発芽し、数年後には再び炭焼きにもちいられた。そのため、炭焼きに利用された樹木は萌芽更新を繰り返すし、根元近くから数本の幹が伸びる独特の形態を示すことになった（写真3）。この景観には、自然と調和しながら付き合ってきた住民たちの知恵が隠されている。



写真3 かつて炭焼きに利用されたカシ（中央）とマテ（左奥）
（2004年9月 筆者撮影）

根元の少し上の部分から幹が分かれている。鳥越地区の住民はこれを「株立つ（かぶだつ）」と呼ぶ。カシの方が「株立ち」が少ない。

できあがった炭は、一部を自家で燃料とする以外、木炭組合等を通して出荷された。このほか、マツを用いたカッチ（ツ）ンと呼ばれる炭も焼かれた。製造方法は単純で、地面に穴を掘り、マツを敷き詰め、火をつけ、そのままの状態直接土を被せて炭化させた。カッチ（ツ）ンはほかの木炭と比べて質が落ち、火持ちもそれほどよくなかった。しかし、高い技術が必要とせず、しかも短時間でできあがるため、頻繁に焼かれた。特に鍬や鋤などの農耕具の修理の際、必要な量⁽⁷⁾をすぐに用意できるため、重宝がられた。

次に信仰に関する場所をみてみよう。集落の北側には、いわゆる鎮守様として、稻荷神社が祭られている。このほか、集落のすぐ西側に祇園様が、b. カキバヤシノタニとj. ウーグエノタニには弁天様が安置されている。弁天は水を司る神であり、天水や沢、谷に湧き出してくる「出水」に頼ってきた人々の願いが表れている。また、集落南部の百万様（大日様）は祭神不明であるが、飼っている牛が病気になったときに、治癒を願った（厳木町教育委員会1985）。集落の南西方向、現在の県道276号線脇には弘法大師像が祭られている。ただし、この弘法大師像は昭和に入ってから新しく安置されたものである。弘法大師像の脇には、祭神不明の小祠があり、年代も不明であるが、こちらの方が古くから祭られていた。ここは隣接する平之地区との境界であり、鳥越・平之両集落の住民が祭っている。彼らは小祠もまとめて弘法大師さんと呼んでいるが、この場所がムラ境を表す場所であることには違い

ない。

このように稲荷神社、祇園様、弁天様、百万様（大日様）、弘法大師様といずれも性格は異なるが、鳥越の住民たちの意識や願いが表出した結果であり、これも環境に対する観念的な働きかけ、すなわち、一種の環境利用とみなすことができよう。

このほか、鳥越集落には3箇所水車小屋が設置され、麦や雑穀の製粉に利用していた。経塚は集落東側の真向かいにある小高い丘であり、その上には各家の墓地があった。これらも人々が創り上げた景観の1つである。

以上、鳥越地区におけるかつての環境利用と生活空間について概観したが、ここで簡単にまとめてみたい。鳥越地区における生活空間は、基本的に農業や狩猟、採集といった伝統的な生業活動にもとづき展開されていた。複数の耕作地のまとまり、すなわちノラが、ムラである集落の周辺および河岸、谷筋に沿って分布し、その中に、農耕と結びついた弁天様が祭られていた。ヤマは雑木林が広がり、狩猟や採集、木炭生産の場であった。ただし、ヤマは耕作地の肥料や牛の飼料となる草や屋根の葺き替え用のカヤを供給する場でもあった。写真2にも示されたはげ山の多くが採草地として利用されていた（図2も参照）。このことから、はげ山はむしろ、ハラとしての機能を果たしていたと考えられる。鳥越の人々はこれらムラ、ノラ、ヤマ、ハラを往来し、生活の場として互いを機能的に結び付けていた。そして、その生活の中で、精神的よりどころである稲荷神社や先祖を供養する経塚、ムラ境を示す弘法大師様、農耕や運搬に欠かせない牛に関する百万（大日）様を目にみえる具体的な地物として設けた。これらが一つのシステムとしてまとまりを持ち、鳥越地区の景観全体を形作っていた。

2 鳥越地区における現在の景観と変化

それでは、現在の鳥越地区の景観はどのようなものであろうか。写真4は1998年の鳥越地区の空中写真である。写真2と比較すると、景観に明らかに違いがみられる。以下、筆者が撮影した写真も併用しながら、鳥越地区における景観の変化と現状について、考察を進めていく。

大きな景観変化の1つは、圃場整備による耕作地の改変である。写真4をみても明らかなように、c. アマミズ、d. ウソ、e. ミナミ、f. ヤマナカ、g. マン（ノ）タニ、i. ホカウラにおいて圃場整備がなされた。圃場整備は1980年代に実施され、工事はd. のウソから始まった。作業能率、生産性を高めるために、面積の広い矩形の耕作地へと整備され、用排水路もコンクリート製の頑強なものとなった。この工事では、南部の厳木ダム⁽⁸⁾の建設残土が用いられた。写真5は1980年頃のd. ウソの圃場整備の様子を撮影したものである。土を掘り返し、排水溝を敷設する様や残土の運搬を考えると、圃場整備はちょっとした住宅・工業団地造成に匹敵する土木工事であることが分かる。写真6は、整備がなされる前と後のアマミズの圃場である。アングルは異なるが、その景観変化は認められる。

植林によっても、景観は大きく変化した。厳木町における植林は、官行造林によって大正期から本格化した。鳥越地区の官行造林は1925（大正14）年から施行された（厳木町教育委員会1971年：395）。その後、第二次世界大戦を経て、高度経済成長期以降も植林は進められた。このような植林の進行には木炭需要の低迷も影響している。家庭への電気やガスの浸透により、木炭は不要となり、鳥越地区の雑木林は針葉樹へと変化した。しかし、その後、安価な海外産木材の輸入量が増加し、厳木町も含めた国内の林業は打撃を受ける。その上、鳥越地区では過疎化と住民の高齢化も重なって、山林の管理は困難な状況となり、放置される場合も出てきた（写真7）。

このほか、かつてのm. ダノクサ刈り場やn. カヤ刈り場といったハラにおいても、植林が進んだ。前述の要因に加えて、化学肥料の導入や、茅葺に代わって瓦葺の屋根が普及したためである（写真8）。o. タカミネをはじめとする狩猟が行われていた場所も植林された。現在のタカミネの頂上には九州電力によって、高圧送電線の鉄塔が建てられている。

かつて耕作地であった場所も植林の対象となった。とりわけ、集落から離れたa. イワセトノタニ、b. カキバヤシノタニ、h. ケタヤマ、j. ウーグエノタニ、k. ウツボダニ、l. ウヲヅルの耕作地は、減反政策と耕作放棄もあいまって、スギやヒノキの針葉樹林へと姿を



写真5 ウソの圃場整備の様子（1980年頃）
（荒久田孝氏所蔵の写真を接写）



写真7 ウーグエノタニのスギ林（2004年9月 筆者撮影）
枝打ちや間伐などの施業がなされず、放置されたままのために枝が伸び放題となっている。



a) 圃場整備前のアマミズの圃場（南西側から撮影）
（鳥越公民館所蔵を接写）



写真8 かつてのカヤ刈り場の跡（2004年9月 筆者撮影）
スギが植わった斜面全体がカヤ刈り場であった。植林が進み、道端に生えるカヤがかつての名残りを示す。



b) 圃場整備後のアマミズの圃場（北側から撮影）
（2004年9月筆者撮影）

写真6 圃場整備前と後のアマミズの圃場の景観



写真9 ウラヅルの水田跡に植林されたスギ
（2004年9月 筆者撮影）

棚田状の水田跡地にスギが植林されている様子が分かる。

変えている（写真9）。もちろん、圃場整備がなされたほかの耕作地においても一部植林が実施されている。ちなみに植林されたのは針葉樹ばかりではなく、クリなども現金収入を得るために植えられた（写真10）。

このように鳥越地区のヤマは、一部の耕作地、すなわちノラを巻き込みながら、全体として針葉樹林へと姿を変えたが、その内部も様々な景観をみせる。写真

11はc. アナミズの東側に隣接する山の景観である。もともとはスギが植林されていたが、管理が行き届かず、竹林が繁茂するようになってしまった。写真12はl. ウオヅル南端の景観である。斜面をスギを中心とする針葉樹林と照葉・落葉広葉樹林が交互に筋をな



写真10 ウツボダニに植林されたクリ（2004年9月 筆者撮影）
クリ林の中に彼岸花が咲き（破線で示した箇所）、かつてこの場所が水田であったことを物語る。



写真11 植林されたスギ林を侵食する竹林
（2004年9月 筆者撮影）

竹林の中にまばらにスギが見える。手前のスギは、近年、新しく植林されたもの。



写真12 針葉樹（主にスギ）と広葉樹が混在するウラツルの斜面（2004年9月 筆者撮影）
写真上部を林道が走る。

している。これは林道の整備中に土砂が崩れ落ち、スギが流された後も放置されたために、照葉・落葉広葉樹が発芽、生育した結果である。現在における人とヤマとの関わりを端的に表した景観といえよう。

このほか、農産物を加工する大切な場所であった水



写真13 イワセトノタニ入り口に残る水車小屋跡
（2004年9月 筆者撮影）

写真中央の石垣で作られた溝に水車が設置されていた。右手前にはかつて使用されていた石臼が残る。



a) スギ林の中に佇むカキバヤシノタニの弁天様
（2004年9月 筆者撮影）



b) 雑草に覆われたウグエノタニの弁天様
（2004年9月 筆者撮影）
写真14 現在の弁天様

車小屋も、動力製粉機等の普及によって不必要となり姿を消した（写真13）。

では、信仰に関する場所の現状はどのようなものであろうか。写真14は、それぞれb.カキバヤシノタニとj.ウグエノタニの南奥の弁天様である。いずれも、現在では、訪れる住民もなく、スギ林の中に埋も



写真15 祇園様 (2004年9月 筆者撮影)



写真16 鳥越集落を見下ろす「祇園さんの森」
(2004年9月 筆者撮影)

破線で示した箇所が「祇園さんの森」。ここだけ周囲より樹高が高い森となっている。



写真17 稲荷神社 (2004年9月 筆者撮影)

百万様 (大日様) や弘法大師様周辺も樹木に覆われた、いわゆる鎮守の森の景観を呈する。

れている。耕作地の縮小と植林のために、人々から忘れられつつある。しかしながら、一方で、集落の西側に安置された祇園様 (写真15) と i. ホカウラ (クタンダニ) の耕作地に隣接した j. ウーグエノタニ入口の弁天様は、現在でも大切に祭られている。とりわけ、祇園様は、その周囲の森を「祇園さんの森」と呼

び、大事にされている。「祇園さんの森」は針葉樹を植林することなく、シイやマテなどの巨木に覆われ、鳥越の集落を見下ろすように、過去の景観を保っている (写真16)。写真2や4でもその森の様子が分かる。稲荷神社や百万様 (大日様)、弘法大師様もかつての姿をとどめ、依然として、住民の信仰を集めている (写真17)。

IV 景観変化の中にみる環境利用と生活空間

現在の鳥越地区は、以前とは異なる景観を呈する。その背後には、住民の生活の変化が作用している。農業や狩猟、採集などの自然環境に依拠した生活から恒常的な農外就業に基盤をおく生活へと大きく変容した。集落外あるいは厳木町外との経済的な結びつきを強め、その影響を受けながら、住民の生活は規定されるようになった。減反政策やスギ・ヒノキを中心とする林業の盛衰が、縮小した耕作地や山々を覆いつくす針葉樹林といった鳥越地区の景観に表れている。

景観の変化は、同時に、住民の環境利用、ひいては生活空間の変化をも表している。たとえば、針葉樹の植林によって、照葉・落葉広葉樹の森は姿を消し、木の実や山菜・山草、きのこ類の採集、沢でのカニや小魚の捕獲、そしてイノシシや野ウサギの狩猟も行われなくなった。また、弁天様などの生業と結びついていた信仰の対象もスギ林の中に忘れ去られることになった。このほか、木炭生産も衰退するなど (写真18)、ヤマにおける環境利用と生活空間が消失したことになる。

このことは住民の意識の中にも表れている。調査の際、数人の古老にタカミネまで案内していただいたが、その帰り、このタカミネで猟を行っていた1人の老人が「やまなかたちのかわってしもうて、わからんごとなってしもうた。」と話された。以前、タカミネは草地で覆われ、頂上からは遠く佐賀平野や有明海が見渡せたという。先ほどの老人は、猟の途上、その風景を眺めながら休息をとったそうである。今はスギ林のためにわずかに佐賀平野がみえる程度である (写真19)。

また、植林は山林に生息する動植物にも影響を与えた。ゼンマイやワラビ、キノコ類はもちろん、木の実やヤマブドウ、林床に繁茂していた野イチゴなどの餌



a) 炭焼きガマの跡 (2004 年 9 月 筆者撮影)



b) カッチ (ツ) ンガマの跡 (2004 年 9 月 筆者撮影)
写真 18 祇園の森付近に残るカマ場の跡

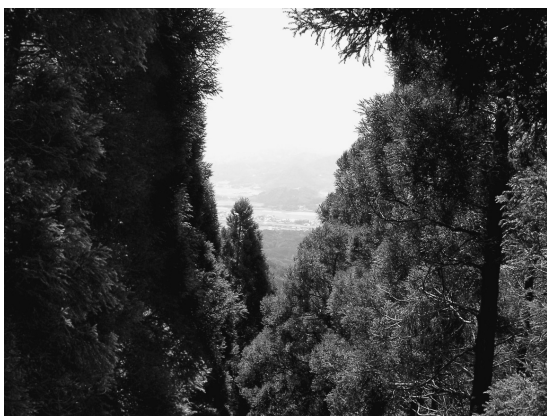


写真 19 現在のタカミネ頂上付近からみえる風景
(2004 年 9 月 筆者撮影)
スギ林の間からわずかに佐賀平野がみえる。

となる植物が減少した結果、イノシシや野ウサギが耕作地を荒らすようになった (写真 20)。そのため、c. アマミズと j. ホカウラ (クタンダニ)、g. マン (ノ) タニの水田は柵で囲まれている (写真 21)。現在、鳥越地区で狩猟免許を持つのは、73 歳の男性 1 人であるが、彼は生業としてではなく、害獣駆除のために猟の解禁期間のみイノシシや野ウサギを狩っている。



写真 20 マン (ノ) タニへ続く道の脇にみられたイノシシの通り道 (2004 年 9 月 筆者撮影)
矢印がイノシシの通り道。現在、このようなイノシシ道が耕作地の近辺に数多く見られる。住民はこのイノシシ道にわなを仕掛ける。

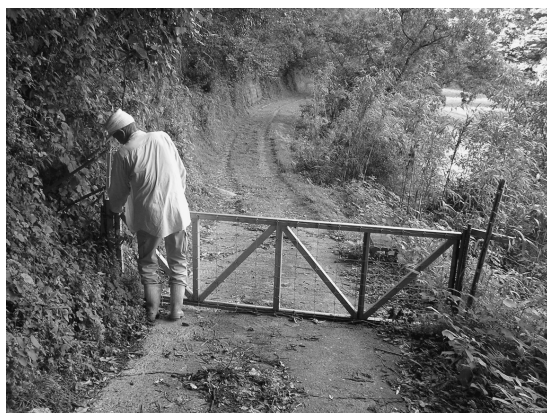


写真 21 マン (ノ) タニの入り口 (2004 年 9 月 筆者撮影)
農作業のために出入りする際、このゲートを開閉する。写真右奥にマン (ノ) タニの水田がみえる。

これらの景観は、生活の舞台としての環境に対する住民の意識や感覚、認識の希薄化を意味し、自然と人間の関係が「調和」から「対立」の構図へ移行したことを示している。すなわち、かつての鳥越地区の景観は、ムラ、ノラ、ヤマ、ハラが有機的に結びついてできあがっていたのに対して、現在の景観はそれぞれが人々の生活の変化の中で、互いの関係が断ち切れ、各々が単独で人間との関係を結んだ独立したものとして存在しているのである。たとえば、圃場整備が実施された耕作地も、用水路や暗渠排水が整備され、化学肥料が導入されるなど、かつてのような天候に左右される灌漑の形態やダノクサ刈り場から運ぶ雑草に頼ることなく、独立したいわば「米の生産工場」として成り立っている。しかも、先ほど述べた、狩猟、採集、炭焼きなど複数の生業活動の場となっていたヤマが、現在では木材供給の場としてのみ利用されているよう

に、各景観の中に展開されていた生活空間は、単一の利用目的のみに特化し、ハラのような時代に適合しない空間は消失した。さらには、写真 12 に示したウラゾルの斜面のように、一旦、人間—環境の関係が切れると、人間が管理・維持してきた二次的環境は崩れ、自然は驚異的な回復力を持って新たな景観を生み出すのである。

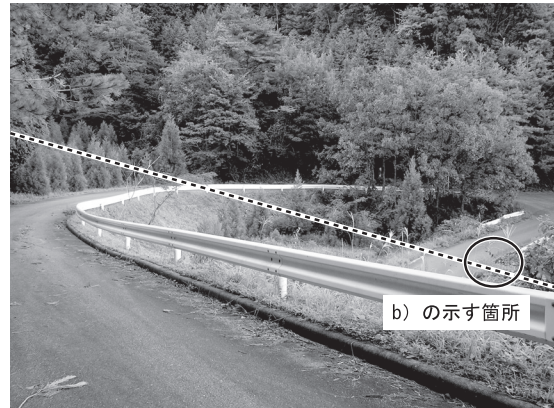
このように、鳥越地区では、圃場整備、減反政策による耕作地の改変・縮小、植林、そして何よりも住民の生活の質的变化によって自然環境との積極的関わりが希薄化し、ムラの景観が大きく変貌した。もちろん、その背後では技術の進展や価値観の変容といったものが錯綜しながら、複雑に絡み合い景観の変化に影響を与えていた。ただし、一方では「祇園さんの森」のような、住民の意識がいまだに働き続け、かつての景観を維持している空間が存在するのもまた事実である。

おわりに

以上、佐賀県杬木町鳥越地区を例に、中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化について、景観をとおして考察を行った。その際、写真を具体的な資料として取り上げた。

確かに、一片の写真の中にとじ込められた景観から、人々の生活や自然環境、両者の関係を探ることは困難な作業である。本報告も、写真のみでなく、いくつかの文字資料と聞き取り調査をもとに景観の解釈を行った。ましてや、本 COE プログラムが取り組もうとしている「澁澤写真」は、過去に他者が撮影した図像資料であり、これに付随する文字資料もごく限られるはずである。しかも、その解釈には、研究者の意識が作用し、真に客観的な景観の解釈が可能なかどうか、不明瞭な部分もある。しかしながら、本報告でも明らかなように、複数の写真を組み合わせ、ムラ全体の様相とその変化を示すなど、活用のあり方しだいでは、ある地域の生活や民俗について、景観をとおして語る上で、写真は極めて有効な手段であるといえる。

ちなみに、写真 22 は、現在カキバヤシノタニを横切る林道である。ここはもともと沢筋に位置し、写真 2 でも確認できるように、水田として利用されていた箇所である。にもかかわらず、ここに道路を敷設した



a) 現在のカキバヤシノタニを横切る林道
(2004 年 9 月 筆者撮影)
破線はカキバヤシノタニの谷筋を示す。



b) カキバヤシノタニを横切る林道脇の土砂崩れ
(2004 年 9 月 筆者撮影)

写真 22 カキバヤシノタニに敷設された林道と土砂崩れ

ために、その下を貫通する水管の容量を越える水が溢れ出したとき、土砂崩れを起こしたものである。筆者を含めた都市域に居住する人間、あるいは少なくとも都市的な生活様式を営む多くの日本人にとっての「ミチ」とは、アスファルトによって舗装され、自動車が走行可能な「道路」のことである。したがって、傾斜を緩やかにするために「道路」は等高線に沿う形で敷設された。鳥越地区における現在の林道や農道も同様である。しかしながら、かつての鳥越地区の「ミチ」とは、このような「道路」ではない。集落の中心部における各家を結ぶ「ミチ」を除けば、基本的にノラヤマ、ハラを繋げる尾根や谷筋が重要な交通路であった。事実、本報告で紹介した「祇園さんの森」へ繋がる「ミチ」は尾根筋に沿って集落と結ばれている。これらの「ミチ」は集落から放射状に延び、住民の生活空間の大切な一部であった。現在では多くの「ミチ」が舗装された「道路」に取って代わられ、かつての

「ミチ」は針葉樹や雑草に埋められると同時に、住民の記憶の中で風化しつつある。すなわち、写真 22 に示された景観は、近代以前と以後におけるそれぞれの環境に対する意識の交錯を示唆しているのである。同時に、これが現代という時代性を表現する景観ともいえる。このように、「林道と土砂崩れ」という景観一つから、写真は住民の生活と環境との関わりの変化について多くのことを語りかけてくる。

また、「祇園さんの森」のように「変わらぬ景観」も存在し、ムラの景観は時代の流れの中で変化するムラ人の行為や行動様式のみではなく、彼らの心の中に信仰や願いといったものがいまだ生き続けていることを示している。写真に写し出されたムラの中の「変わる景観」と「変わらぬ景観」には、このような多次元的な要素が隠されているのである。

「変わる景観」と「変わらぬ景観」、この両者の違いと混在する意味を考察することが、本 COE プログラムが提示する「景観と環境の資料化および体系化」というテーマを遂行していく上での、一つの方向性を示してくれるものと考えられる。

謝 辞

本報告の作成にあたり、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムの諸先生方にご指導いただいた。また、現地調査では、区長の荒久田茂孝氏、荒久田亀彦氏、荒久田一三氏、毛利治次郎氏、吉村照彦氏およびそのご家族をはじめとする鳥越地区の皆様と、佐賀大学文化教育学部山下宗利助教授に多大なるご協力を賜った。

以上、記して感謝申し上げます。

注

- (1) 「澁澤写真」は、1930 年代に澁澤敬三を中心とする研究者たちが、日本をはじめアジア各地の生活の様子や民俗を撮影した写真資料である。現在は神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵・管理し、その数はおよそ 4,000 点にのぼる。このほか、未だ把握されていない多数の写真や 16 mm フィルムなどの映像資料も保管されている。本 COE プログラムでは、これら澁澤敬三らが残した資料をもとにした「景観と環境の資料化および体系化」が主要な研究テーマとされている。これに関しては、香月（2004）、八久保・須山（2004）を参照のこと。
- (2) 藤永（2004）、香月（1989 a）、菊地（2000）、矢野

（2003）を参照されたい。

- (3) 矢野（2003）の指摘によれば、写真を記録と表現の手段として、積極的に調査に活用したのは地理学の分野であるという。具体的な文献として石井（1974、1988、1989、1999）や田中（1935）が挙げられる。
- (4) 拙稿、藤永（2000、2001）。
- (5) 実際、分野を問わず、「環境」と「景観」に関する様々な研究成果が蓄積されている。たとえば、地理学と民俗学では藤永（2000）、福田（1989）、古田（1987）、八田（1999）、市川（1997）、今里（1995、1999）、香月（1989 b、2000）、松本（1989）、松崎（1983、1984）、中島（1986）、中村（1995、1999）、関戸（1987、1989、1994、2000）、八木（1998）らの研究が、隣接分野では重村・山崎（1991）や末原（1978）、山崎・重村（1993 a、1993 b）などが挙げられる。
- (6) ただし、今回の調査では、住民の高齢化と生活様式の変化にともない、彼らの記憶が曖昧になり、どうしても正確な位置と範囲を特定できなかったり、名称すら忘れ去られてしまった場所も多数存在した。これはダノクサ刈り場やカヤ刈り場にも当てはまる。聞き取りによると、少なくともあと数カ所のダノクサ刈り場とカヤ刈り場が存在したことは事実である。この点において、本報告の限界は認めるところであるが、聞き取りによってえた情報のみでも、鳥越地区における住民の環境利用の一端はみえてくると考える。もちろん、地籍図や土地台帳、字切図等の資料から土地利用を探ることもできるが、その場所における住民の具体的な活動を特定するには限界が生じる場合もある。資料としての地籍図や土地台帳等に関する研究については、服部（2000）や鮫島（2004）、佐藤（1986）らの研究を参照されたい。
- (7) 鳥越と周辺の集落には、農閑期になると鍛冶屋がやってきた。鳥越では、この鍛冶屋のために簡素な作業小屋を建て、ここで食事の面倒をみながら、農耕具の修繕を依頼した。この時、カッチ（ツ）ンを必要に応じて焼き上げ、持ち込んでいた。
- (8) 厳木ダムは洪水調整、河川維持用水、水道用水、工業用水および発電を目的として、松浦川水系厳木川に建設された多目的ダムである。1973 年に本格着工し、1987 年に完成した。

参考文献

藤永豪

- 2000「都市近郊山村における地名からみた住民の空間認識——佐賀県脊振村鳥羽院下地区を事例として——」『地理学評論』73 A : 578-601.
- 2001「山間地域における子どもの遊び空間の変容——長野県四賀村保福寺町地区の事例——」『新地理』49 : 1-18.
- 2004「写真資料をもとにした景観分析に関する若干の試論——佐賀平野における村落景観の事例——」神奈川大学

- 21 世紀 COE プログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1: 202-211.
- 福田アジオ
1980「村落領域論」『武蔵大学人文学会雑誌』12 (2): 217-247.
- 福田珠己
1989「四国山地旧焼畑村落における環境区分——高知県吾川村上名野川の小字名を事例として——」『人文地理』41: 364-374.
- 古田充宏
1987「西中国山地における山村の土地利用と環境認識——広島県山県郡戸河内町那須を事例にして——」『地理科学』42: 96-112.
- 八久保厚志・須山 聡
2004「渋沢フィルムの図像解析とその応用」神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1: 105-125.
- 八田二三一
1999「長野県遠山郷山地斜面住民の民俗分類からみた環境認知」『地理学評論』72 A: 789-807.
- 服部英雄
2000『地名の歴史学』東京: 角川書店.
- 広井敏男
2001『雑木林へようこそ! 里山の自然を守る』東京: 新日本出版社.
- 市川秀之
1997「山間盆地集落の空間構成——貝塚市藁原の空間論的分析」『日本民俗学』212: 1-31.
- 今里悟之
1995「村落の宗教景観要素と社会構造——滋賀県朽木村麻生を事例として——」『人文地理』47: 458-480.
1999「村落空間の分類体系とその統合的検討——長野県下諏訪町萩倉を事例として——」『人文地理』51: 433-456.
- 犬井正
1992『関東平野の平地林』東京: 古今書院.
- 石井實
1974『地域を写す 石井實地理写真集』東京: 古今書院.
1988『地理写真』東京: 古今書院.
1989『地と図——地理の風景』東京: 朝倉書店.
1999『地理の風景——古代から現代まで』東京: 大明堂.
- 武内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史編
2001『里山の環境学』東京: 東京大学出版会.
- 香月洋一郎
1989 a「フィールドで何を写すか——伝承論ノート 3」『民俗と歴史』4: 157-184.
1989 b『空からのフォークロア フライト・ノート抄』東京: 筑摩書房.
2000『景観の中の暮らし 生産領域の民俗』東京: 未来社.
2004「なにからどのようににはじめるか」神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1: 59-61.
- 菊地暁
2000「柳田國男と民俗写真——あるアエノコト写真のアルケオロジー——」『日本民俗学』224: 1-33.
- 厳木町教育委員会
1971『厳木町史』佐賀: 厳木町教育委員会.
1985『厳木町の地名』佐賀: 厳木町教育委員会.
- 松崎憲三
1983「村落の空間論的把握に関する事例的研究——千葉県海上町倉橋を試例として——」『国立歴史民俗博物館研究報告』2: 1-39.
1984「景観の民俗学——山麓農村の景観——」『国立歴史民俗博物館研究報告』4: 71-141.
- 松本博之
1989「環境と認識——生態学のアプローチと人間主義的アプローチ——」『文化地理学』大島襄二・浮田典良・佐々木高明編: 117-145, 東京: 古今書院.
- 守山弘
1988『自然を守るとはどういうことか』東京: 農山漁村文化協会.
1997『水田を守るとはどういうことか 生物相の視点から』東京: 農山漁村文化協会.
- 中島弘二
1986「脊振山麓東脊振村における伝統的環境利用——主体的環境区分をとおして——」『人文地理』38: 41-55.
- 中村康子
1995「秩父山地における斜面中腹集落住民による自然条件の認識と土地利用」『地理学評論』68 A: 229-248.
1999「山地の農業的土地利用研究の展開——外帯山地山村との関わりを中心に——」『東京学芸大学紀要 第 3 部門』50: 61-70.
- 日本林業技術協会編
2000『里山を考える 101 のヒント』東京: 東京書籍
- 小野寺淳
1995「文化景観 (1) ——文化景観の形成と変容——」高橋伸夫・田林明・小野寺淳・中川正『文化地理学入門』pp. 133, 東京: 東洋書林.
- 鮫島信行
2004『日本の地籍——その歴史と展望——』東京: 古今書院.
- 佐藤甚次郎
1986『明治期作成の地籍図』東京: 古今書院.
- 関戸明子
1987「尾張西部における村落構成と空間認識」『人文地理』39: 461-472.
1989「山村社会の空間構成と地名からみた土地分類——奈良県西吉野村宗川流域を事例に——」『人文地理』41: 122-143.
1994「焼畑山村における林野の社会空間構成と主体的土地

分類—愛媛県面河村大成を事例に—」『人文地理』46 : 144-165.

2000『村落社会の空間構成と地域変容』東京：大明堂.

重村力・山崎寿一

1991「中久保集落における共同性の展開過程—共同性の空間構造」『日本建築学会計画系論文報告集』424 : 101-108.

末原達郎

1978「日本のムラにおける環境認識の変遷」石毛直道編『環境と文化—人類学的考察—』pp. 457-465, 東京：日本放送出版協会.

田中薫

1935『地学写真』東京：古今書院.

鳥越皓之編

1994『試みとしての環境民俗学—琵琶湖のフィールドから—』東京：雄山閣.

八木康幸

1998『民俗村落の空間構造』東京：岩田書院.

矢野敬一

2003「戦前における映像メディアと「郷土」の表象—熊谷元一『会地村—農村の写真記録』と民俗学—」『日本民俗学』235 : 34-64.

山本勝利

2000「里地におけるランドスケープ構造と植物相の変容に関する研究」農業環境技術研究所『農業環境技術研究所報告』20 : 1-105.

2003「里地におけるランドスケープ構造とネットワーク機能の再生」農業環境技術研究所『農業生態系における生物生息地の特性とそのネットワーク機能』第5回植生研究会資料 : 27-34.

山崎寿一・重村力

1993 a「中久保集落における集落域の土地利用と土地割形式—共同性の空間構造」『日本建築学会計画系論文報告集』443 : 133-141.

1993 b「生活地名からみた中久保集落の空間意識の構成」『日本建築学会計画系論文報告集』451 : 167-176.

〔2004年10月15日受理, 11月10日審査終了〕